

『泥に沈む』 作…ポチ子

女1 「泥に沈んだことある？」

男1 「残念ながら。」

女1 「だよねー・・・」

男1 「逆にいたら興味あるけど、泥に沈んだことある人。」

女1 「私もそうなの。なんか落ち込んだエピソードを話す時に、泥の中に沈んでいる感覚とかいう人いない？すごい思うんだよよね、沈んだことあんのかな。」

男1 「いやいや言葉の比喻ってやつだろ。沈んだことはなくても、動きづらそうとか、這い上がるのが大変そうとか、想像はつくし。」

女1 「まあ、そうなのは分かるんだけどさあ。でもさ、もうちょっとさ、経験あることから表現してほしいんだよね。沈んだことないくせに、感覚分からんやろ！！って気持ちにならない？」

男1 「はっ、俺は分かんねーけど。」

女1 「私だけなのかなあ・・・。だって、世の中には泥に沈んだことがある人なんてほぼいないわけじゃん？それなのに、どうして泥に沈む事と気持ちの沈みを関連づけるんだらう。」

泥の中に入るってさ、暗い時じゃない？潮干狩りとか学校の授業で田植えしたとかさ。割と楽しいものな気がするの。それなのに動きづらそうとか、大変そうとかそんなイメージだけで苦しい感覚の表現として扱うのは不適切だと思います！」

男 1 「思いますって言われてもな・・・」

女 1 「気持ちにはストレートに伝えるべきよ。比喻なんて使わずに、疲れた、辛い、だるい、めんどくさいって叫べばいいの。そうやって言葉にしたほうが絶対スッキリする。」

男 1 「ふっ、お前みたいなガサツには分からない感覚なんじゃねーの？それに泥に沈んだとか言ったほうがかっこいいじゃん、語感が。」

女 1 「私は別にガサツじゃないもん。かっこいいかな？カッコよさを追求するなら、もっと、こう・・・なんか、もっとある気がする。」

男 1 「・・・そんな余計な事考えてるけど、12時に出かけんだろ？間に合うの？」

女 1 「え？あ、やばい！もう50分じゃん！準備しないと！」